

平成 30 年 9 月 2 日現在

機関番号：34303

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02366

研究課題名(和文) アジア系アメリカ演劇における日本演劇および日本文学の要素についての研究

研究課題名(英文) Japanese Theatre and Japanese Literature as Theatrical Devices in Asian American Drama

研究代表者

古木 圭子 (Furuki, Keiko)

京都学園大学・経済経営学部・教授

研究者番号：80259738

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究においては、21世紀アジア系アメリカ演劇における日本演劇および日本文学の要素について調査を行い、アメリカ演劇と日本文学の接点を探った。日系アメリカ人劇作家Chiori Miyagawaの戯曲を中心に、『源氏物語』、『更級日記』、近松門左衛門の『女殺油地獄』、日本の能作品を現代アメリカ演劇に取り入れる実験的試みを調査した。古典文学に登場する人物との対話により、Miyagawaの戯曲の登場人物は、時空間の制限を超越する。その点を踏まえた上で、「記憶」の劇的装置としての機能について考察をした。さらに、文学のジャンルの境界をも超越しようとするMiyagawaの手法について研究を進めた。

研究成果の概要(英文)： I have conducted research on the 21th-century Asian American drama which uses elements of Japanese theatre and literature as theatrical devices. I have especially focused on the works of Japanese-American playwright, Chori Miyagawa. As an American playwright who was born in Japan, and calls herself an "outsider," Miyagawa blends the works of classic Japanese literature such as Tale of Genji, Sarashina Diary, Chikamatsu's Woman-Killer and the Hell of Oil, and Japanese No Theatre into modern American theatre. Her experimental use of classical literary works allows her protagonists to converse with historical figures, creating a unique effect within the theatre and stage. With these points in mind, I have explored how "memory" functions as a dramatic device that goes beyond time and space in Miyagawa's works. I have also articulated how Miyagawa transgress the boundaries of literary genres by blending Japanese novels, diaries and plays into her dramatic works.

研究分野：アメリカ演劇

キーワード：暴力とトラウマ 古典の翻案化 家族劇の解体 時空間の超越 エスニック・マイノリティ ジェンダ
ー 日系アメリカ演劇

1. 研究開始当初の背景

本研究は、日本生まれのアメリカ人劇作家 Chiori Miyagawa が、日本演劇や日本文学の要素とアメリカ演劇の要素を融合する試みについて調査を行うものである。日本における Miyagawa 作品の受容としては、2001年2月に東京で開催された第3回アジア女性演劇会議の招聘作品として、*Stargazers* (邦題『星を見つめるものたち』)が戸谷陽子氏(お茶の水女子大学教授)翻訳、劇作・演出家の坂手洋二氏の演出によりリーディング上演されたことが挙げられる。東京の演劇会議で本戯曲がリーディング上演された経緯を考えると、日本の学術的な演劇研究の場において、Miyagawa の戯曲研究の可能性が広がるのが期待されるものであったが、研究開始当初は、日本のアジア系アメリカ演劇研究者の中で Miyagawa の戯曲が取り上げられる機会はきわめて少なかった。

アメリカ合衆国においては、Miyagawa の戯曲は、日本伝統演劇や日本古典文学と西洋演劇の融合という特質により注目を浴びている。2010年に初演を迎えた *I Have Been to Hiroshima Mon Amour* は、映画 *Hiroshima Mon Amour* (1959) に対する「反駁」として創作された。Martin Harris は、映画が「日本人登場人物の経験」を軽視する一方、フランス人女性の登場人物だけに「記憶」することが許されている「不均衡」を本戯曲が「告発」していると指摘し、戯曲の独自性に注目している (204-205)。

戯曲集 *Thousand Years Waiting and Other Plays* (2012) に序論を著した Caridad Svich は、Miyagawa の戯曲は「東洋と西洋の両方の美学によって」形成されたものであり、その時空間における断続性は、「人間の経験の脆さ」と、それと相対する「記憶の弾力性」を表象すると評している (ix)。Harris も Svich も近年の文学および演劇研究に頻出される「トラウマ」と「記憶」というキーワード

と Miyagawa の戯曲を結びつけ、東洋と西洋、古典と現代文学の融合を成した彼女の戯曲を賛辞している。

2. 研究の目的

本研究では、劇作家 Chiori Miyagawa の戯曲の特質をアメリカ演劇史の枠組みでとらえ、彼女を Off-Broadway を中心とする実験的アメリカ演劇の流れを汲む劇作家と位置付けることである。さらに、劇作家としてのキャリアの初期に、清水邦夫の『楽屋』(1977)を Miyagawa が英訳し、それが *The Dressing Room* としてニューヨークで1992年に上演されていること、『楽屋』で Anton Chekhov の *The Seagull* (『かもめ』1896) がその題材となっており、Miyagawa の戯曲にも Chekhov の翻案化がみられること、亡霊の登場や時空間を超える試みが両劇作家に共通して顕著に描写されていることに着目し、清水邦夫と Miyagawa の戯曲の関連性を探った。さらに『源氏物語』、『更級日記』、近松門左衛門の『女殺油地獄』(1721)を Miyagawa がみずからの戯曲のモチーフとしているところから、日本演劇およびアメリカ演劇研究者、劇作家本人によるシンポジウムやリーディング上演などを計画した。

Ester Kim Lee が指摘するように、アジア系アメリカ演劇は、異なる地域性と文化的背景を想起させるため、「多国籍」で「異文化受容」の性質を有する (101)。ゆえにアジア系アメリカ演劇史においては、1965年に East West Players が *Rashomon* を上演したことに始まり、アジア伝統演劇とアメリカ演劇の共作が多く試みられてきた。しかし、アジア伝統劇を積極的に取り入れてきた演劇集団の作品と Miyagawa の作品が異なっている点は、彼女がみずからを「アウトサイダー」、つまり日本とアメリカのどちらにも完全に所属していないと考える点である (Miyagawa 2009)。その姿勢は、舞台上で時

空間や登場人物のアイデンティティなど、あらゆる境界を越え、それによってみずからを一つのエスニシティ、人種、国という枠組みに束縛しない登場人物の姿勢に表れている。

上記のような戯曲の特質を、融合および越境というキーワードを用いて考察し、Miyagawaの戯曲が、アジア系アメリカ演劇、アメリカ文学、そして演劇というジャンルの枠組みそのものをも揺るがし、拡張する試みだということを論証してゆくこととした。

3. 研究の方法

本研究が、Miyagawaの戯曲における日本演劇、伝統芸能、古典文学と現代アメリカ演劇との接点を探ることを目的とするため、Miyagawaの戯曲の資料収集し、劇作家本人にインタビューを行う必要があった。また、清水邦夫の戯曲に関する先行研究の資料を収集し、その特質について考察を深めた。

平成27年度は、*Thousand Years Waiting*の題材である『源氏物語』および『更級日記』と、演劇における語りとアクションの関係について研究を進めた。本戯曲においては、『更級日記』の作者が『源氏物語』を読む行為と、ニューヨークに住む現代女性が『更級日記』を読む行為が同時進行する。そこで、物語を読む行為、およびその行為が呼び起こす記憶が、時空間を越える要素として本作でどのように機能しているかについて考察した。

上記の調査を踏まえた上で、*Thousand Years Waiting*の題材として『源氏物語』と『更級日記』が選ばれた理由を検証することとした。『源氏物語』の語り手は、「そんなのはいかにもなんでも作り話ではないかと受け取る人もあるだろうと思うが故に、敢えて書くことにしたのである」(『源氏物語 一』244-245)と述べる。ジェラルド・プリンスが定義するように、“story”が「物語の『いかに』」に対立する物語の『何』」であり、物語るもの(“narrating”)に対立する 物語られるもの(“narrated”)(184)であるとすれば、

『源氏物語』は、源氏を主人公とした数々の“story”を語り手がたまたま見聞き、書きとめた語り(“narrated”)という形式をとっている。すなわち、本戯曲は、小説の「内容」と「語り」という形式を劇の構造に当てはめることにより、小説と戯曲のジャンルの境界を超える、あるいは曖昧化することを試みる。上記のような特質が『源氏物語』独自の要素であるのか、他の物語文学にも共通するのかわかる点についても調査を進めた。

本戯曲における作者と読者の関係にも着目した。『源氏物語』の作者紫式部については、山本淳子が「私自身を楽しませるため、感動させるため、私は誰よりも楽しい読者だったと思う」(77)と作者の創作姿勢を分析しているように、*Thousand Years Waiting*においても、物語に没頭する3名の読者、つまり、紫式部、Sarashina、現代女性の間の文学作品(物語)を通じた対話が展開されており、それが、過去の作家が後の作家に影響を与える文学作品の相関性を示している。

当該年度においては、Miyagawaの戯曲における清水邦夫の戯曲の影響についても調査を行った。前述したように、Miyagawaが翻訳および翻案した清水の『楽屋』には、Chekhovの『かもめ』への言及が多くあり、ヨーロッパ古典演劇と現代アメリカ演劇の連続性を追求したMiyagawaとの共通点が多く見いだせる。清水の戯曲は、登場人物を亡霊として登場させるが、Miyagawa自身の戯曲にも多く亡霊や過去からの使者が登場し、時空間の超越というテーマは二人の劇作家に共通するものである。

平成27年度の調査を踏まえ、28年度は、日本伝統演劇や日本古典文学の要素を取り入れたMiyagawaの戯曲の意図についてインタビューを行い、戯曲の日本上演や、講演、シンポジウムなどの計画を具体化した。

さらに、トラウマ体験をテーマにした *I Have Been to Hiroshima Mon Amour*、近松

門左衛門の『女殺油地獄』の翻案 *Woman Killer* (2010)、Chekhov が登場人物となる *Leaving Eden* (2005) について考察を進めた。特に、Chekhov の作品と Miyagawa の戯曲の関連については、平成 27 年度に引き続き、清水邦夫の戯曲研究とも併せて当該年度に集中して研究を進め、両者の戯曲にみられる共通点を明らかにした。

平成 29 年度は、Miyagawa を日本に招聘し、学会での講演会、シンポジウムなどの計画を実行することとした。本人の来日が実現できない場合は、アジア系アメリカ演劇研究者、日本演劇および日本文学研究者の共同シンポジウムを開催し、Miyagawa の戯曲のリーディング上演と併せた企画を考えた。

4. 研究成果

本研究においては、21 世紀アジア系アメリカ演劇における日本演劇および日本文学の要素を網羅した戯曲について研究を行い、アメリカ演劇と日本演劇、および日本文学との接点を探った。研究の中心となるのは、Miyagawa の戯曲を、文学ジャンルの交差および越境という観点から捉えることであった。上記の研究目的については、研究期間内において十分達成されたと考えられる。

平成 27 年度には、*Thousand Years Waiting* の題材である『源氏物語』および『更級日記』と、演劇における語りとアクションの関係について研究を進め、本戯曲において、物語を読む行為とその行為が呼び起こす記憶が時空間を越える要素として機能することを論証した。劇作家へのインタビューも実現し、本研究を進める上での貴重な手がかりを得た。さらに、2016 年 9 月実施予定の Miyagawa の講演および共同のシンポジウムの実施についての計画が具体化した。

さらに、当該年度の研究成果を 2 本の論文にまとめた。『近現代演劇研究』掲載の論文においては、*Thousand Years Waiting* にお

ける「語り」と「読書」という要素に焦点を当てて論じた。*ALA Journal* 掲載の論文においては、*The Dressing Room* と Miyagawa の他のチェーホフの翻案戯曲を取り上げ、亡霊の登場やそれによる時空間を超える試みが、清水、Miyagawa 両者の作品に顕著にみられることから、二人の劇作家の創作姿勢、実験的技法の関連性を探った。

平成 28 年度は、「エスニックマイノリティ演劇研究」をテーマとする日本アメリカ演劇学会第 6 回全国大会に本人をスピーカーとして迎え、アジア系アメリカ人劇作家として人種、エスニシティと向き合うスタンス、さらに、人種とキャスティングにおける問題点についての講演を企画、実施することができた。Miyagawa の講演と関連して、同大会においては、*Woman Killer* を、暴力、ジェンダー、家族の解体という観点から論じた。『女殺油地獄』が主人公の放蕩息子の懺悔の言葉で締めくくられるのに比して、*Woman Killer* は殺人の場面で終幕を迎え、主人公 Clay の行く末や被害者の夫 James の反応についての描写はない。さらに『女殺油地獄』とは異なり、Clay が体現する悪は他の家族にも潜んでいる要素として提示される。これらの要素が盛り込まれることで、Anne の殺害は、あらゆる人間関係に潜む罪の普遍的シンボルへと変容する。国境や時空間を越えるこの試みは、親子、夫婦の関係に焦点をあてるアメリカ演劇の伝統的ジャンルの一つである、いわゆる「家族劇」に対する挑戦であると言える。

Miyagawa 本人を日本アメリカ演劇学会の大会に講演者として迎え、共同のシンポジウムの開催をする企画は、平成 29 年度に計画されていたものであったため、本研究は予想以上に順調に進んだ。アメリカの劇作家の講演とシンポジウム参加によって、研究者のみならず創作者側の声を聴くことができたことは、日本におけるアメリカ演劇研究にとっても多大な貢献となったと考えられる。

さらに平成 27 年 6 月には、Miyagawa の *Thousand Years Waiting* における「読書」および「語りと記憶」という要素について、国際学会 (International Federation for Theatre Research) において研究発表を行い、研究の幅をさらに拡大することができた。また *Woman Killer* について、主にトラウマ体験と暴力という観点から分析し、原作の近松作品との比較も試み、その成果を日本アメリカ演劇学会の大会シンポジウムにおいて発表した。*Woman Killer* は、その両親と子供たちの関係に焦点を当てる描写から、伝統的アメリカ演劇における家族像の反復であるかのようにみられるが、主人公 Clay による友人 Anne の殺害は、彼女が理想の「母親」として提示されているために、伝統的家族像を破壊する試みである。

平成 29 年度は、平成 28 年度に行った *Woman Killer* に関する研究発表に基づき、学会誌『アメリカ演劇』に研究論文を発表した。主にトラウマ体験と暴力という観点から同戯曲を読み解き、近松門左衛門の『女殺油地獄』との比較を試みた。さらに、本論においては、Miyagawa の戯曲を、アメリカ演劇の一つの伝統である「家族劇」を解体する試みとして分析した。本戯曲に描かれる親子関係の葛藤は、アメリカ演劇の古典的作品と評される Tennessee Williams, Arthur Miller, Edward Albee の戯曲にもみられるものであるが、主人公 Clay による Anne の殺害は、人間の暴力に対する秘められた願望を象徴する。本戯曲に描かれる暴力は、幸福な家庭、永続する人間関係というものが、実は「そこにはない」、「未完成なもの」であることを暴露するという意味において、戯曲のテキストという「亡霊」を掘り起こす行為との共通点がみられる。

しかしながら、本戯曲における Walter と Clay の霊的とも言える父と子の繋がりは、

過去から現在への歴史を象徴するものであり、そのような意味においては、戯曲のテキストに書かれている言葉を常に掘り起こし、蘇らせる演劇の象徴として、家族という要素が戯曲で機能している。

以上に述べてきたように、本研究においては、Miyagawa の戯曲が、過去の文学作品および過去の作家たちとの対話を主たる要素とするものと捉え、時空間の超越、亡霊、暴力の持つ意味とトラウマ体験、ジェンダー、エスニシティという観点から彼女の戯曲を分析することにより、アジア系アメリカ演劇研究というジャンルの枠を拡張することに貢献できたと考えられる。

引用文献

- Eng, Arvin. Ed. *Tokens?: The NYC Asian American Experience on Stage*. New York: The Asian American Writers' Workshop, 1999.
- Harris, Martin. "On *I Have Been to Hiroshima Mon Amour*." *America Dreaming and Other Plays*. South Gate, CA: NoPassport P, 2012. 203-207.
- Lee, Ester Kim. *A History of Asian American Theatre*. Cambridge: Cambridge UP, 2006.
- Miyagawa, Chiori. "A Mythical Place Called Grand Isle—Adapting Kate Chopin's *Awakening*." Ed. Sharon Friedman. *Feminist Theatrical Revisions of Classic Works: Critical Essays*. Jefferson, NC: McFarland & Co, 2009. 204-214.
- . *I Have Been to Hiroshima Mon Amour*. *America Dreaming and Other Plays*. 105-166.
- . *Thousand Years Waiting*. *Thousand Years Waiting and Other Plays*. New York: Seagull Books, 2012. 1-32.

---. *Leaving Eden: A Chekhovian Tragicomedy. Thousand Years Waiting and Other Plays.* 90-161.

---. *Woman Killer.* New York: NoPassport P, 2010.

Svich, Caridad. "A Body of Remembrance: Chiori Miyagawa's Theatre." *Thousand Years Waiting and Other Plays.* ix-xxiii.

清水邦夫. 『楽屋』. 『清水邦夫 I: 署名人ノぼくらは生れかわった木の葉のようにノ楽屋』. 早川書房. 2006. 113-181.

近松門左衛門. 田中澄江 訳 『女殺油地獄』. 学習研究社. 2002.

林 望 『謹訳 源氏物語一』. 祥伝社. 2013.

プリンス、ジェラルド. 『物語論辞典』. 松柏社. 1987.

山本淳子. 『私が源氏物語を書いたわけ—紫式部ひとり語り』. 角川学芸出版. 2011.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

古木圭子、「チオリ・ミヤガワの「千年待ち」にみる劇的要素としての物語と記憶」、『近代演劇研究』(日本演劇学会・近現代演劇研究会)5号、査読有、2015. 2-14.

古木圭子、「翻案からみる Chiori Miyagawa の戯曲」、『*AALA Journal* (アジア系アメリカ文学研究会) 21号、査読有、2016. 59-73.

古木圭子、「Sam Shepard の戯曲における赦しと救済—*Heartless* を中心に」、『*経済経営学部論集*』(京都学園大学)第5巻、査読無、2017. 31-44.

古木圭子、「ベリナ・ハス・ヒューストンの戯曲にみるアメラジアン(混血)性と家族像—*A Spot of Bother* を中心に」、『*AALA Journal* (アジア系アメリカ文学研究会) 23号、査読有、2017. 25-39.

古木圭子、「チオリ・ミヤガワの戯曲にみる

暴力、ジェンダー、家族解体—『女殺し』を中心に」、『*アメリカ演劇*』(日本アメリカ演劇学会)28,29巻、査読有、2018. 108-125.

〔学会発表〕(計5件)

古木圭子「埋められた子供の救済—Sam Shepard の *Heartless* と *Buried Child*」、『*日本アメリカ演劇学会第5回大会*、2015年9月13日、於 大阪ガーデンパレス.

古木圭子、「亡霊劇としての Chiori Miyagawa の *Woman Killer*」、『*英米文化学会比較文学分科会*、2016年1月23日、於 日本大学歯学部.

FURUKI, Keiko, "Narrative and Memory as Theatrical Devices in Chiori Miyagawa's *Thousand Years' Waiting*." International Federation of Theatre Research (国際演劇研究学会)、2016年6月14日、於 スtockホルム大学

古木圭子、「Chiori Miyagawa の戯曲にみる暴力、ジェンダー、『家族』の解体 *Woman Killer* を中心に」、『*日本アメリカ演劇学会第6回大会*、2016年9月10~11日、於 エスカル横浜(横浜海員会館).

古木圭子、「Velina Hasu Houston の戯曲にみるアメラジアン性と家族像—*A Spot of Bother* を中心に—」、『*アジア系アメリカ文学研究会 第25回 AALA フォーラム*、2017年9月23日、於 神戸大学.

〔図書〕(計1件)

貴志雅之編、渡邊克昭、西谷拓哉、西山けい子、古木圭子他、『*アメリカ文学における幸福の追求とその行方*』、金星堂、2018.

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

古木 圭子 (FURUKI, Keiko)
京都学園大学・経済経営学部・教授
研究者番号: 80259738